

## 比喩・慣用句の使用度と理解度

——世代差・性差および読書量差——

中 島 悦 子

### 1. はじめに

ここ数年来日本語への関心が高まり、新たな日本語ブームが起こっている。にもかかわらず、「ことばに対する細やかな配慮が、いまではすっかり失われ、日本語がじつにぞんざいに扱われている」（森本哲郎2002）等、「日本語の乱れ」を指摘する声が多い。読売新聞が2002年に連載した『新日本語の現場1』（読売新聞2002）にも、広がる若者言葉を、「乱れ」と捉えるか「時代による変化」と捉えるか、反響が続々と寄せられたという。

文化庁文化部国語課が2002年1月に実施した『平成13年度国語に関する世論調査』では、本来の言い方のほかに、別の言い方も併存する表現について、「乱れ」か「変化」か「多様性」かを調査したところ、例えば、ら抜きことばの「来れる」は「ことばの乱れ」より「ことばの変化」とする人の割合の方が高かったとある。また、古くから使用されてきた慣用句（例えば「けんもほろろ」「水も漏らさぬ」）が若者の間でその8割近くが「使わないし、意味もわからない」として、廃れつつある現状に触れている。この慣用句に関しては、2002年11月に実施された『平成14年度国語に関する世論調査』でも、8つの慣用句（「奇特」「耳ざわり」「役不足」「確信犯」「一部始終」「流れに棹さす」「気が置けない」「閑話休題」）を挙げて、その使用と意味についての調査を報告している。その中「閑話休題」「流れに棹さす」「確信犯」は全世代で「意味を取り違えている」「使わない」人の割合の方が高くなっており、10、20代の若者に絞ると、「閑話休題」の使用率は10代が2.7%、20代が4.0%、「流れに棹さす」に至ってはその使用率は10代が0.9%、20代が3.5%しかないとして、慣用句に対する若者の非用と誤用を指摘している。また読書調査では、「1か月に全く本を読まない」人の割合は全体で37.6%にも上り、年代別に見ると、男女共50代以上（50代男39.7%：女38.3%、60代以上男41.8%：女51.6%）に高く、次いで10代（男38.2%、女31.6%）に高いとして、深刻な読書人口の減少を報告している。

しかしながら、文化庁の調査した慣用句は、その数が非常に限られており、取り上げた慣用句について、あるいは慣用句全体の傾向についてはいまだ調査がなされておらず、その実態は不明である。比喩・慣用句の調査範囲をより拡大化する必要がある。

そこで、本稿では49の比喩・慣用句を取り上げ、若年世代と中高年世代、男性と女性、および読書量によって、その使用度や理解度にどの程度の差があるのか、その実態を調査・分析することにした。

調査方法としては、比喩・慣用句の使用に関するアンケートを実施した。表1はアンケート実施のために作成した調査カードである。調査実施時期は、2002年11月から12月にかけてである。調査対象は、若年世代（10代末～20代初）として、男30名、女30名の60名を、中高年世代（40代～60代）として、男30名、女30名の60名を選んだ。

表1 調査票（「アンケートカード」）

「比喩・慣用句」調査表

調査年月日：[ 2002年 月 日 ]  
 被調査者名：[ ]  
 生年月日：[ 年 月 日 歳 ]  
 性別：[ 男 ・ 女 ]  
 在学学校名：[ ] 大学  
 現住所：[ ]  
 出身地：[ ]  
 独居か家族同居か：[ 独居 ・ 家族と同居 ]  
 親と話す：[ よく話す ・ あまり話さない ]  
 年上の人と話す：[ よく話す ・ あまり話さない ]  
 本を読む：[ よく読む ・ あまり読まない ]  
 ことばへの関心：[ 有 ・ 無 ]

これからあなたの比喩・慣用句に対する知識や使用状況を伺いたいと思います。ありのままをお答えください。列挙したことばについて、いずれかのアルファベットでお答えください。

- A：よく使う  
 B：時々使う  
 C：知っている、または聞いたことがあるが、使わない。  
 D：意味がわからない、または聞いたことがないので、使わない。  
 E：以前は使っていたが、今は使わない。

- |                           |     |                            |     |
|---------------------------|-----|----------------------------|-----|
| 1 <u>奥歯</u> に物の挟まったような言い方 | [ ] | 2 <u>木で鼻</u> をくくったような態度    | [ ] |
| 3 <u>竹</u> を割ったような性格      | [ ] | 4 <u>玉</u> を転がすような声        | [ ] |
| 5 <u>蜂</u> の巣をつついたような騒ぎ   | [ ] | 6 <u>苦虫</u> を噛みつぶしたような顔    | [ ] |
| 7 <u>水</u> を打ったようにシーンとなる。 | [ ] | 8 <u>クモ</u> の子を散らすように逃げる。  | [ ] |
| 9 <u>目</u> を皿のようにして探す。    | [ ] | 10 <u>火</u> がついたように泣いている。  | [ ] |
| 11 <u>のど</u> から手が出るほど欲しい。 | [ ] | 12 <u>猫</u> の額ほどの庭         | [ ] |
| 13 <u>穴</u> のあくほど見つめる。    | [ ] | 14 家計は <u>火</u> の車だ。       | [ ] |
| 15 <u>雀</u> の涙ほどの給料       | [ ] | 16 <u>しらみ</u> 潰しに探す。       | [ ] |
| 17 <u>温室</u> 育ちのお嬢さん。     | [ ] | 18 彼はいつも <u>からす</u> の行水だ。  | [ ] |
| 19 <u>とんぼ</u> 返りで帰った。     | [ ] | 20 返事は <u>なし</u> のつぶでだった。  | [ ] |
| 21 病院をたらい <u>回し</u> にされた。 | [ ] | 22 わたしの目は <u>節し穴</u> ではない。 | [ ] |
| 23 <u>鶴</u> の一声で騒ぎがおさまった。 | [ ] | 24 一家の <u>大黒柱</u> 。        | [ ] |
| 25 <u>ガラス張り</u> の予算。      | [ ] | 26 <u>芋づる</u> 式に捕まった。      | [ ] |
| 27 <u>下へも置かぬ</u> もてなし。    | [ ] | 28 <u>玉</u> の輿に乗る。         | [ ] |
| 29 <u>うだつ</u> があがらない人。    | [ ] | 30 <u>ためつすがめつ</u> 眺める。     | [ ] |

31 敷居が高くて入れない。	[ ]	32 根掘り葉掘り聞かれる。	[ ]
33 けんもほろろの対応	[ ]	34 つじつまが合わない話。	[ ]
35 道草を食って叱られる。	[ ]	36 しのぎを削る。	[ ]
37 てぐすねを引いて待つ。	[ ]	38 水も漏らさぬ警戒	[ ]
39 親のすねをかじる。	[ ]	40 うまい物に目がない。	[ ]
41 早くけりをつけよう。	[ ]	42 そんなに目くじらをたてるな。	[ ]
43 彼女は口が軽い。	[ ]	44 予算から足が出る。	[ ]
45 一旦決めたらてこでも動かない人だ	[ ]	46 凶星をさされた。	[ ]
47 一筋縄では行かない男だ。	[ ]	48 二の足を踏む。	[ ]
49 あまり図に乗るな。	[ ]		

表1に示した49の比喩・慣用句表現は、『ケーススタディ 日本語の語彙』（森田良行他1989）の「比喩」「慣用句」の項目中にある語彙から、無作為に選択し、1文にしたものである。比喩・慣用句の使用度および理解度を、「A（よく使う）」、「B（時々使う）」、「C（知っている、または聞いたことがあるが、使わない）」、「D（意味がわからない、または聞いたことがないので、使わない）」、「E（以前は使っていたが、今は使わない）」の5層に分けた。また、被調査者の性、年齢や出身地等の環境、家族と同居か独居か、親・年上の人とよく話すか話さないかといった接触量、本をよく読むか読まないかといった読書量、ことばに対する関心があるかないかといったことばへの関心度等についても調査した。

## 2. 比喩・慣用句の使用度および理解度

### 2.1 若年世代による比喩・慣用句の使用度および理解度

若年世代の比喩・慣用句の使用の実態を使用率の低い順に示したのが表2である。

表2 若年世代の比喩・慣用句の使用実態

	A		B		C		D		E	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
1 下へも置かぬ	0	0	0	0	22	36.6	38	63.3	0	0
2 玉を転がす	0	0	0	0	24	40	36	60	0	0
3 ためつすがめつ	0	0	1	1.6	15	25	44	73.3	0	0
4 木で鼻をくくる	0	0	1	1.6	25	41.6	34	56.6	0	0
5 ガラス張り	1	1.6	0	0	29	48.3	30	50	0	0
6 けんもほろろ	0	0	2	3.3	22	36.6	34	56.6	2	3.3
7 クモの子を散らす	1	1.6	1	1.6	36	60	21	35	1	1.6
8 苦虫を噛み潰す	1	1.6	1	1.6	38	63.3	19	31.6	1	1.6
9 水も漏らさぬ	0	0	2	3.3	39	65	19	31.6	0	0
10 なしのつぶて	0	0	3	5	26	43.3	30	50	1	1.6
11 猫の額	2	3.3	2	3.3	37	61.6	18	30	1	1.6
12 蜂の巣をつつく	0	0	4	6.6	48	80	8	13.3	0	0
13 目を皿のようにする	0	0	5	8.3	44	73.3	11	18.3	0	0
14 水を打つ	3	5	2	3.3	50	83.3	5	8.3	0	0

15	竹を割る	3/ 5	2/ 3.3	43/71.6	12/20	0/ 0
16	奥歯に物が挟まる	0/ 0	5/ 8.3	47/78.3	7/11.6	1/ 1.6
17	足が出る	1/ 1.6	6/10	36/60	17/28.3	0/ 0
18	火がつく	1/ 1.6	6/10	43/71.6	10/16.6	0/ 0
19	てぐすねを引く	2/ 3.3	6/10	24/40	27/45	1/ 1.6
20	鶴の一声	1/ 1.6	7/11.6	37/61.6	14/23.3	1/ 1.6
21	雀の涙	3/ 5	7/11.6	40/66.6	9/15	1/ 1.6
22	二の足を踏む	5/ 8.3	8/13.3	36/60	10/16.6	1/ 1.6
23	温室育ち	3/ 5	10/16.6	36/60	8/13.3	3/ 5
24	うだつがあがらない	3/ 5	11/18.3	28/46.6	17/28.3	1/ 1.6
25	穴のあく	3/ 5	11/18.3	38/63.3	7/11.6	1/ 1.6
26	からすの行水	2/ 3.3	13/21.6	28/46.6	13/21.6	4/ 6.6
27	とんぼ返り	3/ 5	13/21.6	39/65	2/ 3.3	3/ 5
28	火の車	4/ 6.6	12/20	37/61.6	3/ 5	4/ 6.6
29	敷居が高い	4/ 6.6	16/26.6	25/41.6	14/23.3	1/ 1.6
30	一筋縄では行かない	8/13.3	13/21.6	35/58.3	3/ 5	1/ 1.6
31	てこでも動かない	2/3.3	22/36.6	32/53.3	2/ 3.3	2/ 3.3
32	目くじらを立てる	4/ 6.6	20/33.3	32/53.3	1/ 1.6	3/ 5
33	しのぎを削る	7/11.6	17/28.3	28/46.6	7/11.6	1/ 1.6
34	しらみ潰し	7/11.6	18/30	30/50	1/ 1.6	4/ 6.6
35	芋づる式	10/16.6	16/26.6	27/45	6/10	1/ 1.6
36	たらい回し	4/ 6.6	25/41.6	27/45	1/ 1.6	3/ 5
37	のどから手が出る	10/16.6	23/38.3	25/41.6	1/ 1.6	1/ 1.6
38	根掘り葉掘り	10/16.6	24/40	21/35	3/ 5	2/ 3.3
39	道草を食う	18/30	20/33.3	10/16.6	3/ 5	9/15
40	凶星をさす	23/38.3	21/35	12/20	3/ 5	1/ 1.6
41	玉の輿	16/26.6	29/48.3	12/20	2/ 3.3	1/ 1.6
42	節し穴	12/20	33/55	12/20	2/ 3.3	1/ 1.6
43	図に乗る	23/38.3	25/41.6	9/15	1/ 1.6	2/ 3.3
44	大黒柱	21/35	28/46.6	11/18.3	0/ 0	0/ 0
45	目がない	20/33.3	32/53.3	7/11.6	0/ 0	1/ 1.6
46	けりをつける	28/46.6	25/41.6	6/10	0/ 0	1/ 1.6
47	親のすねをかじる	18/30	36/60	6/10	0/ 0	0/ 0
48	つじつまが合わない	25/41.6	32/53.3	3/ 5	0/ 0	0/ 0
49	口が軽い	42/70	17/28.3	1/ 1.6	0/ 0	0/ 0

表2のうち、使用率の比較的低い25までの比喩・慣用語を取り上げて分析する。最も使用率が低いものは、「下へも置かぬ」「玉を転がす」でA、Bとも使用率は0%とあるように、60人全員が使ったことがないと答えている。両者とも、60%以上がD「意味がわからない」と答え、理解度も非常に低いことがわかる。2位は「ためつすがめつ」「木で鼻をくくる」「ガラス張り」で、使用率が1.6%、「使う」とした人は60人中1人しかいない。D「意味がわからない」とした人は「ためつすがめつ」が70%以上、「木で鼻をくくる」「ガラス張り」も50%以上あり、いずれも理解度が低い。3位は「けんもほろろ」「クモの子を散らす」「苦虫を噛みつぶす」「水も漏らさぬ」で、A・B合わせて使用率は3.3%、「使う」とした人は60人中2人しかいない（以下、使用率はA・B合わせたも

のをいう)。理解力を見ると、D「意味がわからない」は「けんもほろろ」が56%、他の3つも30%を越えており、理解度も低い。4位は「なしのつぶて」で使用率は5%しかなく、D「意味がわからない」は50%もある。5位は「猫の額」「蜂の巣をつつく」、6位は「目を皿のようにする」「水を打つ」「竹を割る」「奥歯に物が挟まる」、7位は「足が出る」「火がつく」、8位「てぐすねを引く」「鶴の一声」と続く。5位から8位までの使用率は8~10%前後である。理解度も低く、「てぐすねを引く」は45%が、「猫の額」「足が出る」は30%内外が「意味がわからない」としている。以下、9位が「雀の涙」で使用率16%、10位が「二の足」「温室育ち」で使用率は21.6%、11位「うだつがあがらない」「穴のあく」と僅差で続く。最後に挙げた11位の使用率も23%しかない。つまり、25までの比喩・慣用句の使用実態を見ると、使用率の高いものでも若者の8割は使っていないことになる。1位から5位まで「意味がわからない」とした人は70~50%と非常に高く、理解度が極端に低い。11位までも50~30%の人が比喩・慣用句の語彙の意味を理解していない。使用率の低さと語彙の知識力・理解力の低さとが比例しているのである。

以上の調査は、古くから会話で使われ、親しまれてきた比喩・慣用句が、若年世代では衰退傾向にあり、殆ど使われていないことを示している。そうした衰退傾向の原因のひとつに若者の比喩・慣用句に対する知識や理解の欠如、無関心さが挙げられる。

## 2.2 中高年世代による比喩・慣用句の使用度・理解度

表3は中高年世代による比喩・慣用句の使用実態を使用率の低い順に示したものである。若年世代との比較のために使用率の低い25の比喩・慣用句を取り上げる。中高年世代に使われていない比喩・慣用句は、1位が「玉を転がす」で、A Bの使用率は20%だが、D「意味がわからない」は5%しかない。低使用率だが60人中57人は意味を理解しており、65%がC「知っているが使わない」のである。中高年世代では最も使用率が低い比喩・慣用句でも大多数の人は意味を理解していることが知られる。2位は「ためつすがめつ」で、使用率は25%、3割近くの人が使わないと答えている。D「意味がわからない」と答えた人は15%しかおらず、半数以上がC「知っているが、使わない」としている。3位は「木で鼻をくくる」で使用率は38%、4位は「下へも置かぬ」で使用率48%、5位「クモの子を散らす」で使用率55%、6位「水を打つ」で使用率58%、7位「蜂の巣をつつく」で使用率63%、8位「温室育ち」「苦虫を噛み潰す」で使用率66%、9位「水も漏らさぬ」「雀の涙」「火がつく」「ガラス張り」で使用率68%、10位「芋づる式」で使用率70%、11位は「道草を食う」「鶴の一声」で使用率72%、12位「しらみ潰し」使用率73%、13位は「竹を割る」「目を皿のようにする」「凶星を指す」で使用率75%となっている。「意味がわからない」と答えた人は「木で鼻をくくる」が5%、60人中3人であるが、その他の比喩・慣用句については「意味がわからない」人はゼロに近い。また、低使用率といっても5位、6位のものの使用率は50%を越しており、7位から10位までのものに至っては使用率が60~70%近くまで達している。25番目の「奥歯に物が挟まる」でも80%とその使用率は高く、8割近くの人が使っている。ちなみに、最も使用率の高いものは「つじつまが合わない」「口が軽い」で使用率は100%、60人全員が日常会話で使ってい

表3 中高年世代の比喩・慣用句の使用実態

	A	B	C	D	E
	数 %	数 %	数 %	数 %	数 %
1 玉を転がす	2/ 3.3	10/16.6	39/65	3/ 5	6/10
2 ためつすがめつ	4/ 6.6	11/18.3	32/53.3	9/15	4/ 6.6
3 木で鼻をくくる	5/ 8.3	18/30	27/45	7/11.6	3/ 5
4 下へも置かぬ	14/23.3	15/25	24/40	5/ 8.3	2/ 3.3
5 クモの子を散らす	8/13.3	25/41.6	19/31.6	3/ 5	5/ 8.3
6 水を打つ	13/21.6	22/36.6	23/38.3	0/ 0	2/ 3.3
7 蜂の巣をつつく	9/15	29/48.3	19/31.6	0/ 0	3/ 5
8 温室育ち	17/28.3	23/38.3	15/25	1/ 1.6	4/ 6.6
9 苦虫を噛み潰す	14/23.3	26/43.3	13/21.6	2/ 3.3	5/ 8.3
10 水も漏らさぬ	20/33.3	21/35	16/26.6	1/ 1.6	2/ 3.3
11 雀の涙	15/25	26/43.3	15/25	0/ 0	4/ 6.6
12 火がつく	13/21.6	28/46.6	15/25	0/ 0	4/ 6.6
13 ガラス張り	13/21.6	28/46.6	17/28.3	0/ 0	2/ 3.3
14 芋づる式	15/25	27/45	18/30	0/ 0	0/ 0
15 道草を食う	15/25	28/46.6	12/20	0/ 0	5/ 8.3
16 鶴の一声	17/28.3	26/43.3	15/25	0/ 0	2/ 3.3
17 しらみ潰し	22/36.6	22/36.6	13/21.6	0/ 0	3/ 5
18 竹を割る	17/28.3	28/46.6	12/20	0/ 0	3/ 5
19 目を皿のようにする	18/30	27/45	14/23.3	1/ 1.6	0/ 0
20 図星をさす	18/30	26/43.3	12/20	1/ 1.6	3/ 5
21 てぐすねを引く	14/23.3	31/51.6	15/25	0/ 0	0/ 0
22 けんもほろろ	21/35	24/40	8/13.3	2/ 3.3	5/ 8.3
23 なしのつぶて	20/33.3	27/45	11/18.3	0/ 0	2/ 3.3
24 からすの行水	21/35	26/43.3	8/13.3	0/ 0	5/ 8.3
25 奥歯に物が挟まる	21/35	27/45	11/18.3	0/ 0	1/ 1.6
26 たらい回し	25/41.6	23/38.3	10/16.6	0/ 0	2/ 3.3
27 敷居が高い	25/41.6	24/40	8/13.3	0/ 0	3/ 5
28 穴のあく	19/31.6	30/50	11/18.3	0/ 0	0/ 0
29 節し穴	16/26.6	33/55	10/16.6	0/ 0	1/ 1.6
30 うだつがあがらない	23/38.3	28/46.6	7/11.6	0/ 0	2/ 3.3
31 二の足を踏む	16/26.6	35/58.3	7/11.6	1/ 1.6	1/ 1.6
32 火の車	26/43.3	25/41.6	8/13.3	0/ 0	1/ 1.6
33 一筋縄では行かない	23/38.3	28/46.6	7/11.6	0/ 0	2/ 3.3
34 のどから手が出る	24/40	27/45	8/13.3	0/ 0	1/ 1.6
35 てこでも動かない	22/36.6	29/48.3	7/11.6	0/ 0	2/ 3.3
36 猫の額	27/45	24/40	4/ 6.6	1/ 1.6	4/ 6.6
37 玉の輿	25/41.6	28/46.6	6/10	0/ 0	1/ 1.6
38 しのぎを削る	26/43.3	27/45	6/10	0/ 0	1/ 1.6
39 足が出る	27/45	26/43.3	6/10	0/ 0	1/ 1.6
40 目くじらを立てる	29/48.3	24/40	5/ 8.3	0/ 0	2/ 3.3
41 根掘り葉掘り	26/43.3	27/45	4/ 6.6	0/ 0	3/ 5
42 けりをつける	34/56.6	20/33.3	6/10	0/ 0	0/ 0



43	とんぼ返り	27/45	27/45	5/ 8.3	0/ 0	1/ 1.6
44	目がない	33/55	21/35	5/ 8.3	0/ 0	1/ 1.6
45	親のすねをかじる	35/58.3	21/35	3/ 5	0/ 0	1/ 1.6
46	図に乗る	31/51.6	25/41.6	3/ 5	0/ 0	1/ 1.6
47	大黒柱	29/48.3	27/45	3/ 5	0/ 0	1/ 1.6
48	口が軽い	33/55	27/45	0/ 0	0/ 0	0/ 0
49	つじつまが合わない	37/61.6	23/38.3	0/ 0	0/ 0	0/ 0

る。つまり、中高年世代はここに挙げた49ある慣用句のうち少なくとも46ぐらいのものは日常の生活で頻繁に使用し、意味もよく理解している。表3の調査結果からは、若年世代のような比喩・慣用句の衰退現象は中高年世代には見られない。

### 3. 世代差による比喩・慣用句の使用度・理解度

比喩・慣用句の若年世代と中高年世代の使用度の差、理解度の差を見るために、使用率の低い順位のものから比較・観察する。表2、表3から「下へも置かぬ」「玉を転がす」「ためつすがめつ」「木で鼻をくくる」は、両世代共に低使用の1位～4位のいずれかに属しており、使用順位という面から見ると世代差のないことがわかる。「クモの子を散らす」「苦虫を噛み潰す」「水も漏らさぬ」「蜂の巣をつつく」も、両世代共に10位以内の使用順位となっている。

しかし、使用度と理解度の面から見るとどうか。1位から4位までの比喩・慣用句については、若年世代の使用率はゼロに近く、意味が理解できない人も60～70%にも達している。一方、中高年世代の使用率は低いといっても20～50%近くあり、意味がわからない人は10%前後と少ない。「意味もわからないし、使わない」若年世代に比べ、中高年世代は「意味はわかるが、使わない」層が過半数を占めている。「クモの巣を散らす」「苦虫を噛み潰す」「水も漏らさぬ」「蜂の巣をつつく」も、若年世代の使用率は3～6%前後で1割にも満たない。「意味がわからない」も30%前後あり、理解度も低い。一方、中高年世代の使用率は50～60%以上あり、「意味がわからない」は0～5%で、理解度は非常に高い。これらから「意味もわからないし、使わない」若年世代と、「意味はよくわかっている、使わないといっても使用率はそれほど低くない」中高年世代との使用実態の相違が顕著となっている。つまり、これらの比喩・慣用句を見ると、世代差による使用順位の偏りは殆どないが、使用度と理解度という面では世代差による偏りが著しく甚だしいことがよくわかる。

また、若年世代には殆ど使われていず、50%近くが意味がわからないとしている「ガラス張り」「けんもほろろ」「なしのつぶて」「猫の額」等について見ても、中高年世代での使用率では、「ガラス張り」が68.3%、「けんもほろろ」が75%、「なしのつぶて」が78.3%、「猫の額」が85%とあるように、7～8割の人が使っている。意味がわからない人もゼロに近く、理解度も非常に高い。その他、中高年世代で使用順位が低い方に属す「水を打つ」は使用率58.3%、「温室育ち」が66.6%、「雀の涙」が68.3%、「芋づる式」が70%とあるように、使用率自体は低くなく、理解度も100%近い。これらを若年世代で見ると、使用順位はそれほど低くなくとも、使用率は、「水を打つ」が8.3

%,「温室育ち」が21.6%,「雀の涙」が16.6%,「芋づる式」が43%と,中高年世代より格段に低くなっている。ちなみに若年・中高年世代共に高使用率の上位10位以内のものを挙げると,「口が軽い」「つじつまが合わない」「親のすね」「けりをつける」「目がない」「大黒柱」「図に乗る」等がある。使用率は,「口が軽い」が若年98%,中高年100%,「つじつまが合わない」が若年95%,中高年100%,「親のすね」が若年90%,中高年93%,「けりをつける」が若年81%,中高年93%,「図に乗る」が若年88%,中高年93%となっている。つまり,使用上位10位以内の比喩・慣用句の使用度については世代差がないことが検証される。

しかしながら,使用上位10位から25位までのものを見ると,若年では急速に使用率が50~20%に下がってくる。これに対して中高年の25位までのものを見ると,使用率が85~78%と高く,使用上位10位以内のものとの差はあまりない。つまり25位までは高率で使用されているのである。若年と中高年の使用実態の差という観点から見ると,若年がよく使う比喩・慣用句はその範囲が非常に狭いのに対して,中高年は広範囲の比喩・慣用句を日常よく使っていることが明らかになっている。

なお,理解度について見ると,若年世代でD「意味がわからない」と答えたものは使用上位10位までは5%以内,10位から25位までもその殆どが10%以内で,予想に反して理解度が高い。中高年世代においてD「意味がわからない」と答えたものは使用上位25位までその殆どが0%で,理解度は100%近い。使用上位25位までの比喩・慣用句の理解度については世代差は殆どないといつてよい。

以上是个々の具体的な比喩・慣用句使用についての世代差を見たものである。次に, A~Eの5層に現れる若年と中高年の使用実態から世代差を見ることにする。

表4 A~E層の使用実態の世代差  
(比率は総数5860に対するもの)

	若年		中高年		計	
	数	%	数	%		
A	352	6.0	1004	17.0	1356	23.0
B	631	10.7	1230	21.0	1861	31.7
C	1345	22.9	562	9.6	1907	32.5
D	551	9.4	37	0.6	588	10.0
E	62	1.0	106	1.8	168	2.8
					5860	100.0

顕著となっている。他方,中高年世代ではB「時々使う」の比率が最も高いこと, AとBを併せた「使う」(38.0%)が, CとDの「使わない」(10.2%)より比率が4倍近く高いこと, D「意味がわからない」(0.6%)の比率が非常に低いこと等が際立っている。つまり,比喩・慣用句の使用度と理解度は,「使わない」「意味がわからない」若年世代,「使う」「意味がわかる」中高年世代と,その差がこの表からも明示的となっている。

表4はA~Dの5層それぞれに現れた若年と中高年の使用実態を示したものである。この表から若年と中高年との対照的な使用実態がうかがわれる。若年世代では, C「知っているが,使わない」が最も比率が高いこと, CとDを併せた「使わない」(32.3%)は, AとBの「使う」(16.7%)より比率が2倍近くも高いこと, D「意味がわからない」ほうがA「よく使う」より比率が高いこと等が



表 5 被調査者の性・年齢・環境・接触量・読書量・ことばへの関心度

	① 性	② 年齢	③ 出身地	④ 家族	⑤ 親との会話	⑥ 年上との会話	⑦ 読書	⑧ ことばへの関心
若年	男30女30	10代48 20代12	関東 53	同居34	よく話す47	よく話す46	よく読む25	有 45
			関西 3	独居26	あまり 話さない13	あまり 話さない14	あまり 読まない35	無 15
			その他 3					
			不明 1					
中高年	男30女30	40代19 50代19 60代20 70代 2	関東 34	同居46	よく話す27	よく話す48	よく読む40	有 54
			関西 2	独居 9	あまり 話さない19	あまり 話さない 6	あまり 読まない19	無 5
			その他20	不明 5				不明 1
			不明 4		不明 14	不明 6	不明 1	

#### 4. 性差・読書量差による比喩・慣用句の使用度・理解度

表5は被調査者の性・年齢・環境（出身地）・接触量の多少・読書量の多少・ことばへの関心の有無をまとめたものである。このうち、本章では男女によって使用に差があるかどうかについて検証する。また、表5の中で若年と中高年との相違が著しい読書量についても、その差が使用の要因となっているのか検証する。ただし、環境（出身地）の違い、家族・年上の人との接触量の多少・ことばへの関心度の有無等が使用要因となるかについては、紙面の都合上、今回の検証からはずす。

##### 4.1 性差による比喩・慣用句の使用度・理解度

表 6 比喩・慣用句の男女の使用実態

		A	B	C	D	E
		男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
1	奥歯に物が挟まる：					
	若 年	0／ 0	5／ 0	19／28	5／ 2	1／ 0
	中高年	9／12	13／14	8／ 3	0／ 0	0／ 1
2	木で鼻をくくる：					
	若 年	0／ 0	0／ 1	11／14	19／15	0／ 0
	中高年	3／ 2	11／ 7	10／17	5／ 2	1／ 2
3	竹を割る：					
	若 年	2／ 1	2／ 0	18／25	8／ 4	0／ 0
	中高年	9／ 8	13／15	8／ 4	0／ 0	0／ 3
4	玉を転がす：					
	若 年	0／ 0	0／ 0	11／13	19／17	0／ 0
	中高年	1／ 1	4／ 6	21／18	3／ 0	1／ 5
5	蜂の巣をつつく：					
	若 年	0／ 0	3／ 1	20／28	7／ 1	0／ 0
	中高年	6／ 3	14／15	10／ 9	0／ 0	0／ 3
6	苦虫を噛み潰す：					
	若 年	1／ 0	0／ 1	15／23	13／ 6	1／ 0

7	水を打つ：	中高年	8／ 6	12／14	7／ 6	2／ 0	1／ 4
		若 年	2／ 1	1／ 1	24／26	3／ 2	0／ 0
8	クモの子を散らす：	中高年	6／ 7	12／10	12／11	0／ 0	0／ 2
		若 年	1／ 0	0／ 1	16／20	12／ 9	1／ 0
9	目を皿のようにする：	中高年	5／ 3	11／14	10／ 9	3／ 0	1／ 4
		若 年	0／ 0	2／ 3	19／25	9／ 2	0／ 0
10	火がつく：	中高年	9／ 9	13／14	8／ 6	0／ 1	0／ 0
		若 年	0／ 1	3／ 3	21／22	6／ 4	0／ 0
11	のどから手が出る：	中高年	5／ 8	15／13	8／ 7	0／ 0	2／ 2
		若 年	6／ 4	9／14	14／11	1／ 0	0／ 1
12	猫の額：	中高年	12／12	14／13	4／ 4	0／ 0	0／ 1
		若 年	1／ 1	0／ 2	15／22	13／ 5	1／ 0
13	穴のあく：	中高年	13／14	12／12	2／ 2	1／ 0	2／ 2
		若 年	2／ 1	3／ 8	19／19	5／ 2	1／ 0
14	火の車：	中高年	8／11	13／17	9／ 2	0／ 0	0／ 0
		若 年	3／ 1	3／ 9	19／18	2／ 1	3／ 1
15	雀の涙：	中高年	12／14	13／12	5／ 3	0／ 0	0／ 1
		若 年	2／ 1	4／ 3	18／23	5／ 3	1／ 0
16	しらみ潰し：	中高年	7／ 8	12／14	11／ 4	0／ 0	0／ 4
		若 年	4／ 3	7／10	17／14	0／ 1	2／ 2
17	温室育ち：	中高年	11／11	12／10	5／ 8	0／ 0	2／ 1
		若 年	3／ 0	4／ 6	15／21	6／ 2	2／ 1
18	からすの行水：	中高年	7／10	10／13	10／ 5	1／ 0	2／ 2
		若 年	1／ 1	2／11	14／14	10／ 3	3／ 1
19	とんぼ返り：	中高年	10／11	12／14	7／ 1	0／ 0	1／ 4
		若 年	3／ 0	6／ 7	18／21	2／ 0	1／ 2
20	なしのつぶて：	中高年	12／15	16／11	2／ 3	0／ 0	0／ 1
		若 年	0／ 0	1／ 2	11／15	17／13	1／ 0
21	たらい回し：	中高年	11／ 9	13／14	5／ 6	0／ 0	1／ 1
		若 年	4／ 0	6／19	18／ 9	1／ 0	1／ 2
		中高年	11／14	12／11	7／ 3	0／ 0	0／ 2

22	節し穴：					
	若 年	7 / 5	16 / 17	5 / 7	2 / 0	0 / 1
	中高年	7 / 9	17 / 16	5 / 5	0 / 0	1 / 0
23	鶴の一声：					
	若 年	1 / 0	2 / 5	17 / 20	9 / 5	1 / 0
	中高年	7 / 10	14 / 12	9 / 6	0 / 0	0 / 2
24	大黒柱：					
	若 年	11 / 9	14 / 14	5 / 7	0 / 0	0 / 0
	中高年	14 / 15	12 / 15	3 / 0	0 / 0	1 / 0
25	ガラス張り：					
	若 年	1 / 0	0 / 0	12 / 17	17 / 12	0 / 0
	中高年	9 / 4	9 / 19	10 / 7	0 / 0	2 / 0
26	芋づる式：					
	若 年	5 / 4	8 / 8	14 / 16	2 / 4	1 / 0
	中高年	8 / 7	14 / 13	8 / 10	0 / 0	0 / 0
27	下へも置かぬ：					
	若 年	0 / 0	0 / 0	10 / 12	20 / 18	0 / 0
	中高年	8 / 6	7 / 8	10 / 14	4 / 1	1 / 1
28	玉の輿：					
	若 年	7 / 9	10 / 18	11 / 2	2 / 0	0 / 1
	中高年	10 / 15	15 / 13	4 / 2	0 / 0	1 / 0
29	うだつがあがらない：					
	若 年	2 / 1	5 / 6	13 / 15	9 / 8	1 / 0
	中高年	14 / 9	12 / 16	4 / 3	0 / 0	0 / 2
30	ためつすがめつ：					
	若 年	0 / 0	1 / 0	6 / 9	23 / 21	0 / 0
	中高年	3 / 1	4 / 7	15 / 17	6 / 3	2 / 2
31	敷居が高い：					
	若 年	2 / 2	5 / 11	14 / 11	9 / 5	0 / 1
	中高年	12 / 13	13 / 11	4 / 4	0 / 0	1 / 2
32	根掘り葉掘り：					
	若 年	4 / 6	8 / 16	14 / 7	3 / 0	1 / 1
	中高年	11 / 15	15 / 12	2 / 2	0 / 0	2 / 1
33	けんもほろろ：					
	若 年	0 / 0	0 / 2	8 / 14	20 / 14	2 / 0
	中高年	13 / 8	9 / 15	5 / 3	2 / 0	1 / 4
34	つじつまが合わない：					
	若 年	10 / 15	18 / 14	2 / 1	0 / 0	0 / 0
	中高年	18 / 19	12 / 11	0 / 0	0 / 0	0 / 0
35	道草を食う：					
	若 年	8 / 10	10 / 10	6 / 4	2 / 1	4 / 5
	中高年	6 / 9	15 / 13	7 / 5	0 / 0	2 / 3
36	しのぎを削る：					
	若 年	5 / 2	8 / 9	13 / 15	3 / 4	1 / 0
	中高年	16 / 10	11 / 16	3 / 3	0 / 0	0 / 1
37	てぐすねを引く：					

	若 者	0 / 2	2 / 4	13 / 11	14 / 13	1 / 0
	中高年	6 / 8	17 / 14	7 / 8	0 / 0	0 / 0
38	水も漏らさぬ：					
	若 年	0 / 0	1 / 1	19 / 20	10 / 9	0 / 0
	中高年	13 / 7	11 / 10	6 / 10	0 / 1	0 / 2
39	親のすねをかじる：					
	若 年	9 / 9	17 / 19	4 / 2	0 / 0	0 / 0
	中高年	15 / 20	13 / 8	2 / 1	0 / 0	0 / 1
40	目がない：					
	若 年	9 / 11	16 / 16	4 / 3	0 / 0	1 / 0
	中高年	15 / 18	9 / 12	5 / 0	0 / 0	1 / 0
41	けりをつける：					
	若 年	15 / 13	11 / 14	4 / 2	0 / 0	0 / 1
	中高年	18 / 16	9 / 11	3 / 3	0 / 0	0 / 0
42	目くじらを立てる：					
	若 年	2 / 2	8 / 12	17 / 15	1 / 0	2 / 1
	中高年	13 / 16	13 / 11	3 / 2	0 / 0	1 / 1
43	口が軽い：					
	若 年	20 / 22	9 / 8	1 / 0	0 / 0	0 / 0
	中高年	14 / 19	16 / 11	0 / 0	0 / 0	0 / 0
44	足が出る：					
	若 年	1 / 0	1 / 5	19 / 17	9 / 8	0 / 0
	中高年	13 / 14	12 / 14	4 / 2	0 / 0	1 / 0
45	てこでも動かない：					
	若 年	1 / 1	10 / 12	16 / 16	1 / 1	2 / 0
	中高年	9 / 13	16 / 13	4 / 3	0 / 0	1 / 1
46	図星をさす：					
	若 年	13 / 10	10 / 11	5 / 7	2 / 1	0 / 1
	中高年	9 / 9	12 / 14	7 / 5	1 / 0	1 / 2
47	一筋縄では行かない：					
	若 年	5 / 3	9 / 4	14 / 21	1 / 2	1 / 0
	中高年	11 / 12	14 / 14	4 / 3	0 / 0	1 / 1
48	二の足を踏む：					
	若 年	3 / 2	3 / 5	18 / 18	5 / 5	1 / 0
	中高年	7 / 9	18 / 17	4 / 3	1 / 0	0 / 1
49	図に乗る：					
	若 年	11 / 12	13 / 12	4 / 5	1 / 0	1 / 1
	中高年	16 / 15	12 / 13	1 / 2	0 / 0	1 / 0

表6は49の比喩・慣用句について、若年と中高年における男女の使用数と使用率を示したものである。この表6を分析すると、表7のような結果を得た。

男女の性差が無い比喩・慣用句は、若年世代が31.63%（49に対する比率）、中高年世代が29.59%あり、両世代共に高率である。そのうち若年・中高年に共通して性差が無いものは22.44%ある（内訳は表7を参照）。比喩・慣用句の若年と中高年の使用率は異なっているが、個々のものについ

表7 個々の比喩・慣用句の性差の有無

性差無	数	[番号]
若者	31	[ 2 4 ⑦ ⑩ ⑪ 13 ⑭ 15 ⑯ ⑰ ⑲ ⑳ 22 24 ㉔ 27 ㉙ 30 ③④ ③⑤ ③⑥ ③⑦ 38 ③⑨ 40 ④① ④② ④③ ④④ ④⑤ ④⑥ ④⑧ ④⑨ ]
中高年	29	[ 5 ⑦ 9 ⑩ ⑪ 12 ⑭ ⑯ ⑰ 20 ㉒ ㉔ ㉙ 31 32 ③④ ③⑤ ③⑥ ③⑦ ③⑨ ④① ④② ④③ ④④ ④⑤ ④⑥ 47 ④⑧ ④⑨ ]
若・中高年共性差無	22	[ ○印 のもの ]
性差有	数	[番号]
若年 男の方がDが多い その他	10 8	[ 6 8 9 12 17 18 20 23 25 33 ]
中高年 男の方がCが多い その他	12 8	[ 1 2 3 4 13 15 17 18 21 23 24 25 ]

て詳細に検討すると、若年・中高年それぞれ比喩・慣用句の使用においては、男女の性差のないものの方が多いことが検証される。

しかし、比喩・慣用句のうち、男女の性差のあるものも37%あり、その内訳を分析すると若年・中高年世代それぞれ異なる結果が得られた。若年では最も性差があるものは、D（意味がわからないので使わない）で、男の方が女より多い。中高年で最も性差があるものはC（知っているが使わない）で、やはり男の方が女より多い。つまり、若年では男の方が比喩・慣用句の理解度が低く、使わない傾向が見られる。他方、中高年では意味がわからないとする比喩・慣用句は男女にあまり差がない。むしろ、中高年では意味を知っていても使わない比喩・慣用句に性差があり、男の方に多いという傾向が見られる。

中高年で性差があるものについて見ると、比喩・慣用句の語彙の意味にその要因があると思われるものもある。例えば、「温室育ちのお嬢さん」「玉の輿に乗る」「雀の涙ほどの給料」は、男の方が意味は知っていても使わないと答えている。また、「水も漏らさぬ警戒」は男の方に使われ、「うまい物に目がない」は女の方に使われている。

以上の分析結果をさらに、A～Eの5層に現れる数値で確かめる。

表8が示すように、若年世代において最も性差がある層はD「意味がわからない」層で男の方が女より比率は3倍近く多い。中高年世代で最も性差がある層はC「意味がわかるが使わない」で男の方

表8 性差によるA～E層の使用率  
(比率はA～E総数5860に対するもの)

	若年男		若年女		中高年男		中高年女	
	数	%	数	%	数	%	数	%
A	187	3.2	165	2.8	490	8.3	514	8.8
B	276	4.7	355	6.0	608	10.4	622	10.6
C	640	10.9	705	12.0	308	5.2	254	4.3
D	528	9.0	223	3.8	29	0.5	8	0.1
E	39	0.6	23	0.4	35	0.6	71	1.2

が多い。この数値は表7の分析結果と矛盾していない。

次に、使用か不使用かでA BとC Dを比較してみる。若年世代では「使用する」A Bの比率は女の方がやや多く、「使用しない、意味がわからない」C Dの比率は男の方が多い。中高年世代では「使用する」A Bの比率は男女ともにあまり性差がないが、「使用しない、意味がわからない」C Dの比率は男の方がやや多い。

以上から若年では男の方が女より比喩・慣用句の使用度・理解度が低いこと、中高年でも比喩・慣用句に対する使用度・理解度は男の方が女よりやや低いことが明らかとなっている。

## 4.2 読書量による比喩・慣用句の使用度・理解度

表9 読書量の多少によるA～E層の使用率  
(比率はA～E総数5775に対するもの)

	若年				中高年			
	読む		読まない		読む		読まない	
	数	%	数	%	数	%	数	%
A	198	3.4	154	2.6	730	12.6	240	4.1
B	247	4.2	384	6.6	799	13.8	393	6.8
C	577	9.9	768	13.2	345	6.0	199	3.4
D	175	3.0	376	6.5	5	0.08	28	0.5
E	32	0.5	30	0.5	81	1.4	14	0.2

ここでは、「本をよく読む」人と「あまり読まない」人とでは比喩・慣用句の使用に差が出るかどうかということについて検討する。表9によると、若年世代では「読む」人と「読まない」人の差はD層で顕著となっており、「読む」人に比べて「読まない」人が2倍以上も「意味がわからないので使わない」となっている。また、C層「意味がわかるが使わない」でも「読まない」人の方が「読む」人より多い。本を「読まない」人は

比喩・慣用句の意味がわからないし、使わないという当然の結果が出ている。中高年世代では「読む」人と「読まない」人の差はA～Eの各層に見られる。A「よく使う」もB「時々使う」も「読む」人が「読まない」人より2～3倍多い。本を「読む」人が当然比喩・慣用句をよく使っている。D層も「読まない」人に多く、読書量が少ないと使用度も理解度も低いことがわかる。ただし、中高年ではC層に限って「読む」人の方に多いという興味ある結果が出されている。

以上、若年・中高年世代共に読書量の多少が比喩・慣用句の使用度・理解度を左右していることが明らかとなっている。

## 5. おわりに

比喩・慣用句の使用実態とその世代差・性差および読書量の差をアンケート調査にもとづいて分析した結果、次のようなことが明らかになった。

世代差に関しては、若年世代の使用度・理解度が非常に低く、使用率がゼロに近いもの、全く理解度がないものもすくなくあり、49ある比喩・慣用句のうち39ぐらいのものは非常に使用率が低い。この若年の使用実態は文化庁の調査と変わらない結果となっている。他方、中高年世代では49の大半は使用率が非常に高い。使用率が低いものも若干あるが、意味はよくわかっており、49全



て理解度は非常に良い。使用度・理解度の低い若年世代と使用度・理解度の高い中高年世代といった明確な世代の差が明らかになっている。

性差に関しては、比喩・慣用句を個別的に見ると性差のないものの方が多い。しかし、性差のあるものを観察すると、若年では男の方が女より使用度や理解度が低い傾向にあり、中高年でも女より男の方が使用度や理解度がやや低いという結果が出ている。

読書量に関しては、若年・中高年共に本を「読まない」人の方が比喩・慣用句を使わないし、意味もわからないと答えた比率が高い。つまり、読書量が少なければ比喩・慣用句の使用度・理解度も低くなるという結果が数値上でも実証されている。

#### 参考・引用文献

- 森田良行他 1989『ケーススタディ 日本語の語彙』おうふう  
 森本哲朗 2002「まず、まともな日本語を」『文藝春秋－美しい日本語－』9月臨時増刊号 文藝春秋  
 読売新聞 2002『新日本語の現場1』読売新聞社  
 文化庁文化部国語課 2002『平成13年度 国語に関する世論調査－日本人の言語能力を考える－』財務省印刷局  
 文化庁文化部国語課 2003『平成14年度 国語に関する世論調査－日本人の国語力－』財務省印刷局